

報仇

繪本四季物語

前篇

一

913.5
工
前編 1



喜怒哀樂可以勸善  
喜怒哀樂可以懲惡

# 報繪本四季物語

大坂

榮木書樓梓

三通鼓角四夏雞

日色高升月色低

時序秋冬又春夏

舟車南北復東西

鏡中次第人顏老

世上參差事不齊

若向其間尋穩便


一壺濁酒一餐蔬



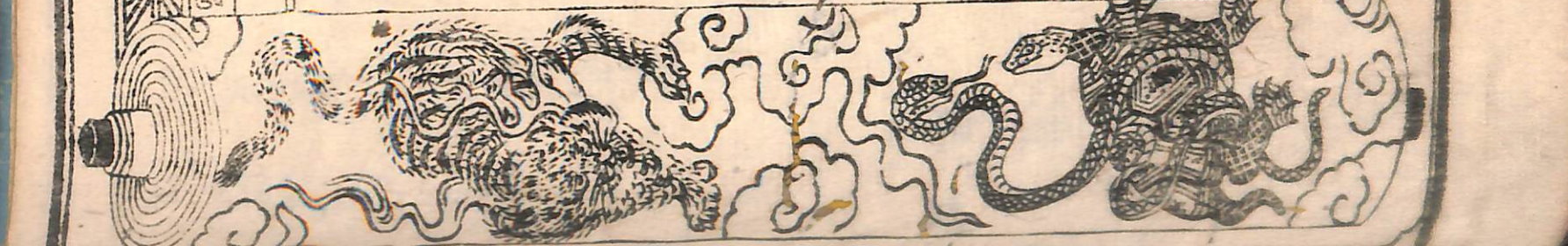
唐伯虎題







# 所 論



春夏秋冬自序

晉郭熙嘗著山水論曰。春則豔  
冶如咲。夏則蒼翠如滴。秋則明  
淨如粧。冬則慘淡如睡。語豈非  
浪說也。余偶遊覽武州金澤。感  
春想秋。欲使<sub>下</sub>芻蕘語<sub>中</sub>其地之山  
水。芻蕘復請使<sub>下</sub>余語<sub>中</sub>江都之劇  
場。余固不知劇場。頓以爲此。一



出戲資其口譚蓋應兒輩所好  
耳。題曰春夏秋冬旨趣之所在。  
雖無復序引之可徵。能俾觀者  
如目擊歌舞也。此雖特爲獎飾  
戲謔。然有所喚醒俗子而盡情  
亦何害爲浪說哉。曩昔孔翁猶  
有所戲詩曰。善戲謔。今不爲虐  
今。作者在焉。一日書肆來需稿  
於余曰。屬者稗史行于世。有是  
哉事之奇也。盍傳之上。東矣。於  
是休暇。舐筆。遂序以授焉。  
文化三曆舍丙寅春正月

東都

振鷺亭主人





報四季物語前編總目

振鷺亭主人 編次

一之卷

江之嶋えのしま小艶おん之の佑書画會すけあやかのかい試闘しとう也

七里濱あちりがたな小濱瀨夫人おませふじん風流ふうりゆうを競きとす

義ぎ小憑よりのて高麗四郎こま深窓しんそうを謀まわる

身み成な抛なて艶おん之の佑岡すけおか諱なづ成な促うながす

二之卷

百ひゃく緑りよく長ちやう者しや鞠まを誥ごく才子さいし成な試しむ

濱瀨夫人あませふじん席せきと責せきて佳人けいじんを與あふ

艶おん之の佑金澤文庫すけかねさわぶんこの印いんを篋くわる

男女川おんながは御所谷ごしょや乃小吏こづい成な開ひらき

三之卷

美女みよめ好男こうなん投奔とうほんし義ぎ成な完ます

痴人ちじん醉漢すいなん遊戯ゆうぎし笑わらと獻けんむ

第一さい齣せう

第二だい齣せう

第三だい齣せう

第四だい齣せう

第五だい齣せう



第六齣

路江身を朝夷奈此切通カト入カト陷カトす  
艶ウツクシ之ノ佑ユキ血チ々々鼻ハナ缺ケ地チ藏ゾ入ス濺ス々々

四之卷

松風マツカゼ僂人ウツシヤ十覽ジュウラン臺ダイ小奇コキを現アハを

路江ミチエ料兒リョウイ鎌倉山カマクラヤマ入イ操マツ々々耀ヤウす

伊三イサ由比濱ユビハマ入イ擅ウチ拏カ印インを賺ウす

三途さんず河婆カハ新居ニヤウの談タン魔堂マドウ入イ荒アラむ

五之卷

第九齣

嶮峰ウツクシ檢校ケンギョウ綽チヤク趣ソウ入イ劇場ゲキヤウ々々説セツ

艶ウツクシ之ノ佑ユキ奇キ出デ入イ江エ湖コ上ウエを玩アソ

盤井イハシ唐士テウシ原ハラ入イ奇キ緑キョクを結ムス成ス

前編五卷

第十齣

高麗コウレイ四郎シロウ花水ハナミヅ橋ハシに兄ケイ第ダイを物モノを

報ウチ仇コト四季シキ物語モノガタリ前篇ゼンペン總目次ソウモクジ畢ハシ



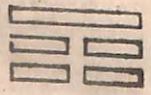


木配東其色青主春  
 八難之木陰也号萱  
 性女其德元其志怒  
 其声呼

路江



東遇春為肝臟  
 為尚書主生之  
 木陽也号青帝  
 龍王其音角出  
 双調声



澤田  
 艶之  
 佐





火配南其色赤主其  
 二儀之火陰也号陽  
 童女其德亨其志喜  
 其声笑



盤井

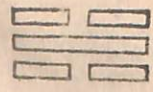


坂東三田五郎是業

南遇箕為心  
 臟為帝君七  
 陽之火陽也  
 号赤帝龍王  
 其音徵出黃  
 鐘調







男女川滝之助

西、過、秋、為、肺、臟、  
為、將、軍、九、厄、之、  
金、陽、也、号、白、帝、  
龍、王、其、音、高、出、  
平、調、声、

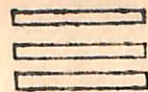


金、配、西、  
其、色、  
白、主、秋、  
四、絶、之、金、陰、也、号、美、勢、女、  
其、德、利、其、志、憂、其、声、哭、

路里







北遇冬為賢臟  
 為列女一德之  
 水陽也号黑帝  
 龍王其音羽出  
 盤淺調



平冢高麗四郎金孝

水配北其色黑  
 主冬六害之水  
 陰也号福女其  
 德貞其志恐其  
 声呻



富里





○原是書皆寓言亦但事蹟ナシトイハ唐解元奇出して世ヲ玩フ故事ヲ以証トス作者ノ本ツ所マツ易ノ乾天ヲ包坤地ヲ資テ黄帝龍王惠吉女ニ效テ二個ノ夫妻ト作シ竟ニ八卦ノ人物ヲ生ス那八名ノ佳人才子各奇ヲ振世ヲ驚シテ共ニ功勳ヲ立名義ヲ顯スニ件々アリ事ヲ成ニ至テ六之ヲ大虚ニ飯スソレ易經開卷兩卦コレ乾坤ニ震離巽ハ只ハ男女タリ男女ノ剛柔ヲ四時ノ配遇ニ撮テ以趣ヲ掲出し終ニ場ノ奇聞ト成ス乾元亨利貞ノ五冊ニ至ラハ自ラ貞正利アルヲ喻頌ル春秋ノ名義ヲ識ラシ觀者共レ察諸○總テ事游戲ニ出テ殆劇本ニ類シ而モ正史ニ合ストイハ亦裨官者流ノ遺意ナリ最猥雜ヲ厭スシテ鏡花水月頌アリ逆アリ實ニ善ヲ彰シ惡ヲ瘴ル事切ニメ兒輩ノ哭ヲ止ム作者ノ本懐於是方暢タリコレ江湖上ノ歌吹臺ニメ聊談笑ニ擬スル耳庶覽者コレヲ玩テ儻能共向慕スル所ヲ知ラハ則一ツノ助ナラメヤハトソ

報仇四季物語前編卷之一

東都

振鷺亭主人著

第一齣

江嶋小艶之佐書画乃會を闘せ  
七里濱小濱瀬夫人風流を競す

粵あつ北條きたがう太京たいけい太夫氏たふし康かた八相別はちさうべつ小田原おくだわら不在ふざい味あじと威いと遠とん近きんと  
震ふるをを區くスス小田原おくだわらハハ雙ふた花はな乃の地ちとと高たかのの輩はひ弱じやくトト城しろ下したの  
驅かき施し盜たうんんハハ車くるまハハ先せん祖ぞ早さう雲うんよよ紀きらら其その了りやう後ご一いつ段だんのの衝つ小せう澤さく  
田た艶えん之の佐さととのの人ひとありあり先せん祖ぞハハ藤ふじ倉くら終しゆう昌ちやう乃の時とき代だい杖しやう本ほん坐ざとと  
出い身しんしてして俣い豆ず相さう模ものの山やまをを一いち邊へんにに更さらかかわわてて後ご志し々々木き料りやうとと依よてて  
一時いちじ巨きよ萬まんのの豪ごう富ふととりりをを以よ來らい小せう條じやう家けのの軍ぐん用りやう金きんとと調てう連れん



連々不仕送也乃由(今艶之依代)到ても尚國主の顧面と羨す  
 ちまはかのづらふ乃用ひも重く祖考の庇廕由因て家声の聞(一)  
 隠るるも艶之依素も聰明極く豊饒の鉤の字同天を  
 色琴の成右は書とたは弦を詩文を器風雅れ乃通せざるは  
 艶之依のく富貴小満るるも小あは生得て容貌清雅白粉と  
 傳言が如く唇朱成塗るるごとくはて極て故東一乃艶男あはじ  
 途中小おわて婦人遇者も又顧盼るるそのはじとや後るにあら  
 棠花の身して今年二十歳の春迄を書を要する縁故ありその  
 事情ハ四箇周れ奉るなりて其事といふハ

一ツヨハ

刺繍剪裁小精巧又能家東成齊房貞女  
 婦人の諸藝不悉くは且風流才和勝る奇女

三ツヨハ

三十二相具うつくもれを暇なき玉乃美女

四ツヨハ

良人乃種子はていまだ男ふる馴ぶる處女  
 此匹箇周乃羨譽一个を虧子束るる金々備でるに中これ匹偶

たらずとてうつく目小愛のめははてして後日月日をどほる惣じて  
 世間乃女流大概貞と才と顔とあるハ甚稀なまハなり後より  
 小禄十年の春羽列江の徳よおわて天女法樂のより書画乃會を  
 借也あり艶之依もまはる相して標峰檢校といへ琵琶法師を  
 まもつて小田原成發進てやぞに徳小をふてぬは傳修檢校と云  
 ハ曲藝の如もはて本琴とよものを工する伯が逸點がみふ  
 ところすさて此日江た坊とふ居停子諸國の達人藝の如く  
 集しるも艶之依ハ元より高名の才ふるゆ(筆を下せば千言立



さまろふ就毫然揮ハ四坐の人こころの勢もとよまじむるを賣善と  
 銜ともぐらその交をむすび面と徹をのめく榮とひ書試二ひ画をも  
 とめて毛邊帝傑扇盈とひひえ勢之佐とや笑たぐれ縁視小倦て  
 その類一き不従じて姑くその席と避川標後檢校と共も標との  
 欄行小倚靠之酒成斟真と傳ふ四方の風素と見とてこんとて  
 遠眼鏡とりて瞻望る小柳江傳と申ハ山水の真妙世て巨勢  
 氏も筆と筆川備漢齊も画のく小及びびじびと二月己のこ乃  
 日るまバ天氣晴明うて此傳山の麗ハ我車ひまへん方おほ  
 途小西北を眺とバ箱根足柄山富士の言根も於まじり近く東  
 南ふまバ固漱川砥上系勝裁の村ハ袂浦福村を倚濃小尚  
 目もあつた...

打吊んで居るうらるう怒ら勢を懸ていりや命頂礼大辨才者天  
 女擁護のものと密法ひて只今彼處の顯下乃摩我我小取得は  
 め給ふと二顧禮拜茶致ははまバ侍にあり侍る標後檢校と  
 寄く小首と傾まあると拈てとるハを正龍の顯れ侍るハるく死體  
 小ひさるが公今懇精を致して彼處の顯下れ壁とまわぬんを初と  
 給ふハ何事ぞや勢之佑がうまバ彼と彼小ハ天女降臨まし極  
 龍乃顯の壁の工とて義人あつたまを法する先生盲目はてまは  
 見も事あつたれども今某が語るを聴て身と悦まめたまへ修へ  
 こま我はてこそ何事あるまは目と顯其の身を測ては居るその時  
 勢之佑あつたひ遠眼鏡とあて時と停て考らるハ某今遠眼鏡試  
 のめて途よ七里を渡れ辺成る所ハ一は族の御所風の女扇進を



















い再く成耻て世をくらやまに備へすたど風雅の趣とく老を志ひ  
 まる高後陽房と号すを宗嘉大量はて幾万石の材まゐる事  
 守録唐の後小あ次専ら金買ひき者を悩めて人をすふ事我子の  
 正く事此故は遠近此人の事か親希長者と称して彼を以貴し  
 かり往昔北條兼房後中平頭時公造まのり金澤又康は蹟九代  
 りて類廢はるる百縁教中して北條家も鉄券と湯中あり  
 たよ金沢の沖所合ふ又庫と嘗て和漢乃書籍を養ひ學校と  
 設らざるが今學寮は養ひ置はるるの學校東國北國より多く  
 不依るとどうも事ある叔と又彼内室演歌主人の國學は陸和ま小  
 志ある婦女子をあつて集れて教諭し果は從良の事もとよく小  
 計ひやせしむる人々は後所の要女は宮侍の女史を以て

いりも詩身後法跡鞠小ゆき法なきむまび等兼むじり事又  
 貞統乃女児をかりのふ世よと好む事まひたまは兼之佑を  
 成して愕然として大ひ小孫あてまらる祝詞の下りるハ実よみ主人ハ  
 天下無双の名婦人として世に婦女をその領首とせ徳峰がふふ  
 まる愛ある被まんが近侍小園園文章の伯女流翰死の才あるを  
 ありすとのふもとの又數十人の内よま主人四名の女を撰出される類  
 を出華を拔者とはびよく時を停て看とるその多勢の中ハ極で  
 釋を考みびきりたるまそりゆる女四名あんとて語里ルハ絶之佑が  
 又たあつたその四名を看分極きて脚又遠眼植を看守り晴とた  
 りく熟く看去ふ事ふまを几骨ふあつる義女四名まをどのめく  
 と見ふ事あつたその一名を只見ふ小







瀧の芙蓉花乃あつた水きりぬる花務堂の東の秋意と  
と名震の白地小菊の桐華花燈せ花号よ六葉蝶と標さるる  
標峰谷とてあやう名震の白の秋のよと標さるる美人の路里と申して  
路にが婦なりとの心操優美さるる山似葉さるる標あつて東國一の力士  
と云ん者お祝偶せん申すの艶之依も成てて玉を眼鏡と似との一名と  
と只見えり

雲光雪能勝乃かときや俾約とて水煙の霜中ゆるある  
とく後のはさきか婢娟とて清涼の水や清まるるに巻巻初杜  
のほどて丹の三名よと見えは儀表おとなさびさ標さるる衣  
巻はと花お五三の桐の花号成標さるる花らうお

中て瀧瀬ま人の號客あつとの稟性嗜ぬく松島の志あつて人お

怪甲て中へ我身矮さるる威あつて猛らざる武士を求むべしとの人お  
艶之依も成てて又再さるる先生尚精しく我お告ては標さるる  
標峰さるる件のおく夜震の及を青赤白黒乃四時の色小分ちさるる  
漢瀬ま人の物好うて陽のよと春其の花声るるを長陰の又秋冬  
乃閑雅なるを示す人さるる金澤小石物ありといふ四石八木甲香唐  
猫は四名の養命の女扇連容貌の勝とさるるのよ小兆す心標優  
みとさるる暗お花さるる情風月れ意成透とさるる見人魂を述すと  
りも東は公のよ成てて權且妻とせん六四名の中らよと取さるる  
お名震之依さるる某鳥と鑿定すべしと待かざれば時丹々くらうく  
見とさるる那一位の主人侍女二十余名を率てける小随衆女の結東



うらたしきまのし  
 るる 艱妍清奇 青絲の梳宿 春雲を堆一翠冠 飄々惚惚  
 香風十里の吹氣 氳たる佳氣 三霄小過 子懸之依 玉成  
 見せしよく 神瀉 意揺て 醉るが如く 只呆とて 討あるま 六の  
 室の北麓 六七所の間 潮乃了たる時 ちまれば なる後路 して 渡す  
 悠揚 して 徳山 試るまで 進登る 靴小一 擁れ 女鴈 連に 九坊の 前小  
 いろ 髪之 依が 眼下 試 遇を なるが 正も 是 赤繩の 繫る べき時 幕 到る  
 ちや 髪之 依が 手に 持て 吟 篋の 扇 子 ぬの うちを 滑り 落ちて  
 らず その 路に 肩小 著て 地より 陸き 路に 何事 とも 頭  
 と 回 搦上 を 受て じに 艶之 依 搦 行小 倚 居て 忽ち 二人 面 成 合せ  
 四目 一 び 見て 若小 直 下 向 上 見 止 見 止 見 止 見 止 原より 此 路に 棟 漢  
 して 靴小 携 為 ありて 潘 安が 靴 子 建 才に せよと 吹 嘘 せよと

実を 訪ひ して 六 摠て なる 九 庸の 俗子 多と 嫌 合て 平 方 まで 成  
 恨 せ 由 今 日 艶之 依が 風 諷 俊 雅の 人物 なる 成 見て いくん ぞ 意 ざん ち  
 け 満 面 笑を 帯て 目を たる ぎ 髪之 依ハ 路に 今 様小 眼 裏 乃  
 語の 中より 試る まで なる 舞 足の 踏を 忘る 意 ぎ 携と 下を 来る 門 亦  
 小 出て 忙 甚く 身 を 躬 め ぬ ち 又て なる 八 某 今 不 覚 小 扇 子 と ち 玉  
 一 簾 忽の ぬの まひ 甚き 玉 札を び じり たり 乃 唐 突の 罷と 宥 さま  
 とも 再三 只 顧 小 徒 まれ 巴 路に 尚 向 小 ぬくの 玉 ぎ 男 中 の 養 人 小 屈  
 ら して 忽ち 面 蓋 垂れ 斂 咲て 疎の 厩 向と 偷して 云 何 ち 此の 分 説  
 成 び 膝 小 や 凝 び 身 と 傷 ち なる 何 小 ち 玉 束の 小 ち 玉 束  
 頻 ち 小 眸 と 凝 して 情 を 通 ず 此 時 養 長 婢 等ハ 其の 傍 依 主人 小  
 附 率て ち 玉 束 所 と じ 六 路に 忙 甚く 七の 場を 立 込 う と 玉 束



七八遍頭を回してそのかみぬ髪之依も又眼色を大して見おほし路に  
 於て本院の門前にはほご又懸之依が高と顧之微晒て暖目世が遠小  
 一族の中おまぎれてきお門内お進みぬこては本院と六別院  
 主人祈禱のほむ処より外向の紫の幕が張掃除奇麗なる  
 して花鏡乃管侍最者重なる光景なり此時艶之依ハ甚ごん迷  
 く本院の門前お眺むる待も彼路にさらお出きたるは只果  
 して又江左訪乃橋と小飯中某とルるよど姫塔檢校呵々と咲て云  
 公良久くいぶと乃お小桃徊た世と某推料も小かの春装秋冬  
 成一帯中お推んと相ひ控へにわびや懸之依も又咲て某一枝の  
 花とまらぬ折びて心お易からずおひはる小糸河春装秋冬と一  
 時小採花獲る事おんち西の路又咲てふ一枝の花とハの青衣の美人  
 を求めことおたるえび精いづお懸之依の果してあまら某今うの花を  
 一目見下る意を我意の花とほて縁たもおひふがいのふ標後がよいな  
 の路にまたはりの六室お對揚と韓城宋玉おむまきく果て佳偶な  
 りこのうらなむら此事容易共懸ふま艶之依が某金幣と厚  
 懸之の媒妁と以挑んおは花何奈お折る事おんや標橋頭を  
 播てえいお成就意来はよの故の遠近の豪門富室日来標と  
 亦そのまをとりともの四個の女おのく心小大事ありて物おらも  
 草の院や漫遊主人堂中の玉れ如く寵を深き六の月の面目は拘て人の  
 朝暝と招く遠駕と負意を廻され後おくひとんとお小懸之依に  
 なる程おしお思量してえなるの遠所見微さく一室貴お泥まお

七八遍頭を回してそのかみぬ髪之依も又眼色を大して見おほし路に  
 於て本院の門前にはほご又懸之依が高と顧之微晒て暖目世が遠小  
 一族の中おまぎれてきお門内お進みぬこては本院と六別院  
 主人祈禱のほむ処より外向の紫の幕が張掃除奇麗なる  
 して花鏡乃管侍最者重なる光景なり此時艶之依ハ甚ごん迷  
 く本院の門前お眺むる待も彼路にさらお出きたるは只果  
 して又江左訪乃橋と小飯中某とルるよど姫塔檢校呵々と咲て云  
 公良久くいぶと乃お小桃徊た世と某推料も小かの春装秋冬  
 成一帯中お推んと相ひ控へにわびや懸之依も又咲て某一枝の  
 花とまらぬ折びて心お易からずおひはる小糸河春装秋冬と一  
 時小採花獲る事おんち西の路又咲てふ一枝の花とハの青衣の美人  
 を求めことおたるえび精いづお懸之依の果してあまら某今うの花を  
 一目見下る意を我意の花とほて縁たもおひふがいのふ標後がよいな  
 の路にまたはりの六室お對揚と韓城宋玉おむまきく果て佳偶な  
 りこのうらなむら此事容易共懸ふま艶之依が某金幣と厚  
 懸之の媒妁と以挑んおは花何奈お折る事おんや標橋頭を  
 播てえいお成就意来はよの故の遠近の豪門富室日来標と  
 亦そのまをとりともの四個の女おのく心小大事ありて物おらも  
 草の院や漫遊主人堂中の玉れ如く寵を深き六の月の面目は拘て人の  
 朝暝と招く遠駕と負意を廻され後おくひとんとお小懸之依に  
 なる程おしお思量してえなるの遠所見微さく一室貴お泥まお



お由ていさせん某様と敷束と得んといはるも只頼のふん動て定ま  
りて是の先生のよき計較も示さるらんや標峰の某見事  
ふの場本を自烈のまは様素張儀とて説きもも快て其  
情と曲げてその事の射頭好時の面笑およびてよく討  
備てその人配せんを某とおおなるもの天を經りて地成緯  
と懸丹と徹一の場人成取ゆべきことこのまゝ我推しすおが  
のこびる高儀共及び起之佐と某いふもしての場成請り  
むる事四つ先生良計もて我におおて本意と逐まむるお  
の實小本業乃而目うらまわのよとの多候を申すまの候とまべ  
の場がらふはの我より望を起して壓つけおある小金幣と用る取  
候事候が望お様にて聘札の厚薄およすと思宜く信を道て

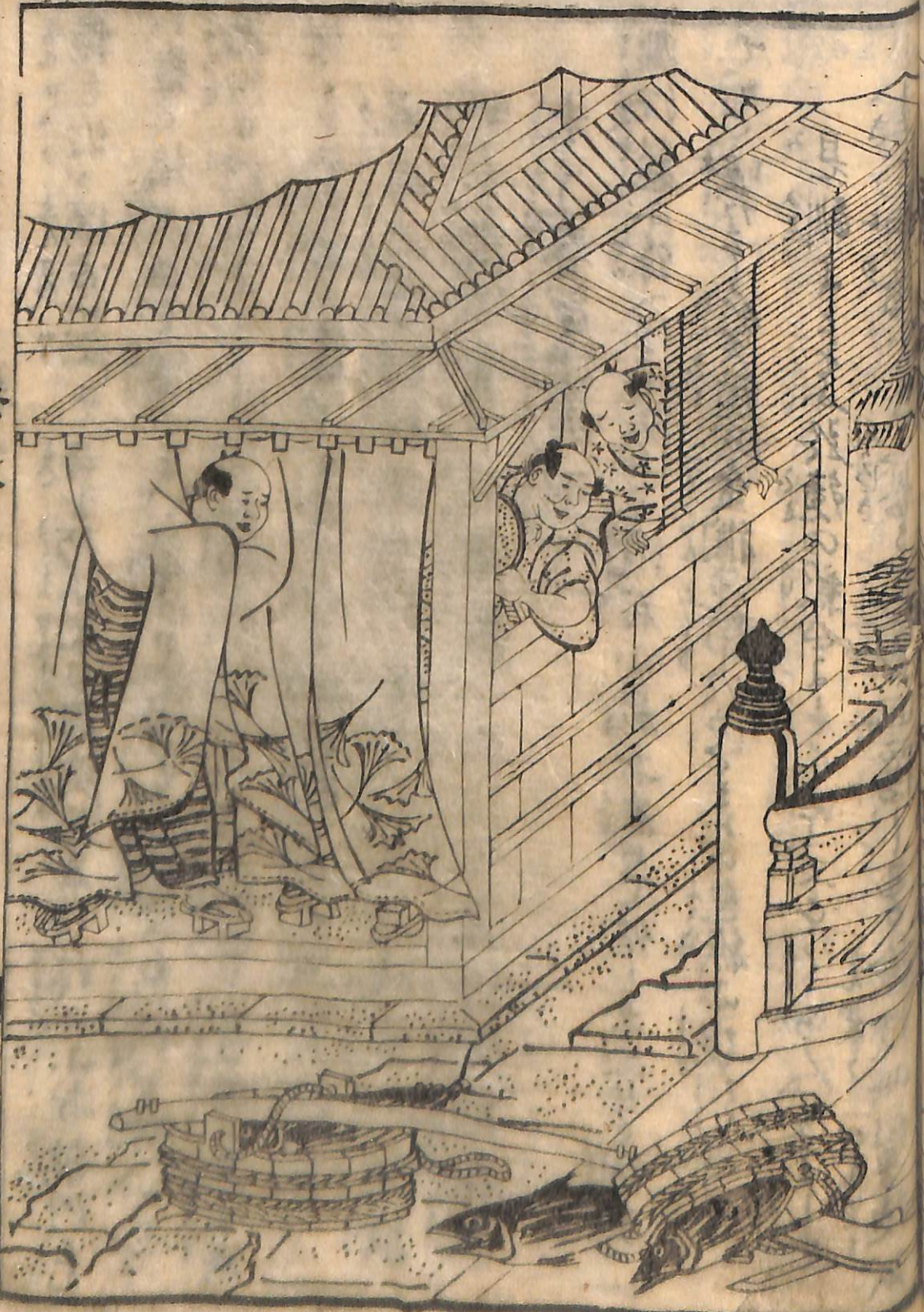
渠を感てまむるにあのを勝おきて近くすも彼路に操ゆふは  
々々這般々と低言はるる熱之佐多を拍て去甚奇う神機如  
算先生ハ休小則龍楠氏とを欺く其おしく乃とく急ぎ此如  
計成乃おとて即當日夜と共高儀小およびハ何のとか計  
まんとは是標峰檢校が他意なりと後を小と聞てり

第二齣

義も憑く高麗四郎深窓を謀る  
身を抛て艶之佐闘争を促す

かくて演義主人此傳ふ九二十日ある伯留ありて是を佐との間  
窺ふ本院の動靜表裏はしてすにも計畧の出来べき拍とる  
ありが一夕標峰檢校事と旅館の探望小託て本院の演義  
夫人の機嫌と伺ひて後さてこの路に傍なる處小招きて繼り







あんのすけ 多ん草 かな  
勢之依が演言小傲て言を巧小前日唐突せ車以揺く小お詠川も

ハ整く依がいさうう賜すまいらうう甲あものとして一箇の色袂と與(ル)六

路にも何と申らんうとはううぬ格 是れと云ふ小描金小雪(画) 盒子(火)

依との色袂小善ゆく春を松に説黄鶯調の詞をど賦(り)

風雨送春歸杜鵑秋花亂飛青苔滿院朱門間孤

燈半垂孤衾半欹蕭蕭孤影汪汪淚憶歸期相思

未了春夢遠天涯

路に勢小依入してありしが流石小教お赤めて何と云出せる伺もつ

てやう暖かきう勢鏡成金網の巾に依くまの色袂小現引寄せ

見訓よととふ於鏡の影ごよとくとてとく歩人日するとも

持之里てまふともてつじに六艶之依音もたゆく押返く吟(り)

遊小流うぬ思ひまどわり小善お抜小演依主人の遊覽日敷こらて既

江等式發響あり金沢を嘴路と歴(る)と雲との日まをうけし六巻て

勢之依藍縷と股衣を成さのて忽ち下着の袴小をぬを換て穿

以女とかり只を幸く轎子も附率て前にまみ後よおまてう路に

影も由として暮ひゆくとの日ハ鎌倉雪の下も止宿ありし六巻之依も

同く傍の飯店小泊り朝暮また後よを起て行わぬ歩く其日の

夕六浦の郊内金澤小到此処ハ高買物成かへる勢花の地

る此一行ハ挑隊ハ扇市の中間を進むゆあハ當路の人の右とた小

除てゆく勢之依ハ街よへより頻よの路に傍近く寄りて依との

向をとりぬぬ路に首と向じて勢之依を二目見しりし勢を識勢(る)



者乃指し矢を射して只顧を往て躊躇す楚之佐と又激怒す  
 してその面を打つるに矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て  
 と回て楚之佐を打つるに矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て  
 云をのり来むるに矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て  
 又其も向ふるも矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て矢を射て  
 互小面を向合せしく抱小一斬の比頭鋪あり新小い百法之處  
 一今の奥二買の巾も臂高をまきまの腿轉て競志く奥荷成  
 撫ひ大音を其物堅奥と呼し川流ひよんで走来じがわて匾擔  
 乃尖を楚之佐が肩に撞めて忽ちおのまが力小都會て後彼と刺  
 荷成覆して奥と地とよまたらじぬひ奥二買大ひも憤り一紀とく  
 乃のりてくるに西島珠のりるに路を走踏てめんを我高買の妨

成るすや此難奥二買おる時、忽ち千金の損とるよと鎌倉の物堅奥  
 六船すや此奴づくの山乃後せん目いよ見えんと云猶小匾擔とおつ執  
 只一打と親小艶之依が眉間も傍て打てけるも忽ち免び鋪の内より山  
 本を辱むべき臂を伸る奥二買が頸成攪で中不提お呀と声叫るる  
 奥二買ハ約莫七八回をり去り出され筋斗で掀翻るるもあるる  
 伴の比頭鋪内より猛然とてあつては出る人あり楚之佐此人乃取  
 其首小濃紫の巾幘と裁き身も高麗織の仕衣を穿一腰の大刀を  
 帯し本履を踏み高長くて眼尖く鼻高てはあつて恰も無双の仇依は  
 勢ひ傍ととらつて是より楚之佐大ひ力をめて比とよむを下て一礼  
 成のりて此人打願きて云とも尚都内小我を知る後生等一人もあつ  
 某元より強を折き弱成助く足下此と怒る来られとを罵るる時小







君を備へ二人盗を執て互に快飲をどほる時其意之依演形夫分  
 の侍女路に在意隠匿て此處まで来りたるは我語を且いふ迄て自ら  
 をき東城懸勅再返りて高麗に第一星叙にも及びて来りたるは  
 路にハいも人の書さると畢竟渠が後業とある小何の仔細あん  
 なる此の力を因ふ美ならず其驪龍領下の珠もとも容易く  
 能れども美人乃情と撓る事ハ如何なる十樊吟百馬其獲を合  
 力づくゆてい及びははる我小一の苦計ありとて艶之依が身小つく  
 低言如げとととと海む怒之依大お喜びてとあるは其神妙の計あり  
 明日の行の終はそその夜ハ此酒樓におおて夜明兩人胸中の  
 東城傳りてとととと福意のありなり

第九回 本物語 前編 卷之一 終





